

- 34) 脱稿直後, Reinhardt Herzog, *Non in sua voce-Augustins Gespräch mit Gott in den Confessiones*, Poetik und Hermeneutik XI, Das Gespräch, 1984, München, 213-250 が届いた。視点の相違はあるものの、この論文の所在を教示いただいた G. Madec 教授に感謝申し上げる。声はどこで、いつ現象するかを考察する際に、詳しく検討したい。

提 題 『三位一体論』におけることば論

中 川 純 男

1

imago dei であるわれわれの精神に御言の類似を探求するアウグスティヌスは、『三位一体論』第十五巻で次のように言っている。

「音声となる以前のことば、さらに、音声の類似として思いめぐらされる以前のことばを捉えることができるなら、このことばはいずれの言語でもないことば、すなわち諸国語と呼ばれ、われわれの場合はラテン語であるような言語のいずれでもないことばであるから、この鏡を通しこの謎においてではあるが、かのことば、『はじめにことばがあった。ことばは神のもとにあった。ことばは神であった』と言われていたことばを見ることがすでにできるのである」¹⁾。

音声として響くことば *verbum prolativum* が語られる以前にわれわれの精神の内へ語られることば、しかも、声を発するに先立ち音節をたどって考えられることば *verbum cogitativum in similitudine soni* よりさらに以前に語られることば、このことばこそ、アウグスティヌスによれば、われわれにおける御言の類似としてのことばに他ならない。このようなことばを精神の目で捉えることができるなら、そのときわれわれは御言を、この鏡を通しこの謎においてではあるが、すなわちわれわれの精神における類似としてではあるが、見ているのである。この御言の類似としてのことばを、われわれにおけるすぐれた意味でのことばであると考え²⁾、書かれたことば、話されることばに先立つ根源的なことばであると思ふことが、ことばについてのどの

ような論を帰結することになったかを見届けることが、われわれの目的である。以下、この「われわれにおける根源的なことば」は、それがことばであると認められる以前の呼び名をもって *cogitatio* と呼ぶことにしよう。書かれたことば、話されることばといった通常の意味でのことばとの混同を避けるためである。

2

われわれの *cogitatio* が御言の類似であると認められるのはなぜか。それは、御言が御父から生まれ、御父の知っていることを御父の知っている通りに知っているのと同じように、われわれの *cogitatio* も、われわれの知 *scientia* から生まれ、知られていることを知られている通りに考えているからである³⁾。この意味でわれわれの *cogitatio* と *scientia* との間には、御子と御父との間に認められたのと同じように同等性 *aequalitas* が認められる⁴⁾。これに対し、通常の意味でのことば、すなわち話されることば、書かれたことばは *cogitatio* を示すしるし *signum* であるにすぎない。話されることばは *cogitatio* の *signum* であり、書かれたことばは話されることばの *signum* であると言われている。ことばについてのこのような論が、アリストテレスにまでその源を遡ることのできる考え方を含んでいることは明らかである。それゆえわれわれはアウグスティヌスの論を分析するための手がかりをアリストテレスに求めよう。もっともわれわれが試みるのは、歴史的な観点からアリストテレスの影響をアウグスティヌスに読みとることではない。アウグスティヌスの論の独自性を明らかにするための視点をアリストテレスに求めるのである。

アリストテレスは『命題論』第一章で次のように言っている。声としてのことば *τὰ ἐν τῇ φωνῇ* は、魂における受動態 *τὰ ἐν τῇ ψυχῇ παθήματα* のしるし *σύμβολα* であり、書かれたことば *τὰ γραφόμενα* は声としてのことばの *σύμβολα* である。書かれたことば、声としてのことばは必ずしもすべての人に同じではないが、魂における受動態はすべての人に同じである。このアリストテレスの論を先のアウグスティヌスの論と比較するとき、いくつかの点における両者の共通性は明らかである。

まず第一に、通常の意味でのことば、すなわち話されることば、書かれたことばの成立の根拠を魂の内に求めている点において共通している。また、書かれたことば、話されることば、魂の内に成立する事態の間に一定の対応関係を認め、その関係を「しるし」と訳すことのできる語によって表している点でも共通している。さらにま

た、書かれたことば、話されることばが特定の言語に属しているのに対し、魂の内に成立する事態は特定の言語に属していないと考える点でも共通している。これらの共通点を手がかりに、二つのことば論を比べてみよう。

なぜ魂の受動態、あるいは *cogitatio* は、特定の言語に属していないのか。その理由をアリストテレスに求めるなら、それは魂の受動態がまさに「受動態」であることによると言えよう。魂に働きかけ、魂に受動態を形成するのは事物 *πρᾶγμα* である。したがって魂の受動態は事物の類似 *ὁμοίωμα* である。しかるに事物はすべての人に同じであり、特定の言語に属していない。それゆえ、事物により形成された受動態もすべての人に同じであり、特定の言語に属していない。アリストテレスはこのように考えたものと思われる。アウグスティヌスが *cogitatio* は特定の言語に属していないと言う理由もある意味でアリストテレスと共通である。なぜなら、*cogitatio* は *scientia* から生まれると言われているが、これは言い換えるなら、*cogitatio* は *scientia* から形相を受け取っているということであり、さらに *scientia* はもの *res* から形相を受け取っているからである。それゆえ、アウグスティヌスにおいても *cogitatio* が特定の言語に属していないことの根拠は、ものが特定の言語に属していないことに求められる。*cogitatio* はものに対してもある種の同等性を有している。

しかしながらアウグスティヌスは、*cogitatio* が特定の言語に属していないとは言っているが、すべての人に同じであるとは言っていない。それどころか、*cogitatio* がすべての人に同じであるということは、アウグスティヌスにとって、ただちには認めることのできない考えであるように思われる。このことはアウグスティヌスが *cogitatio* をどのようなものと考えているかを知るなら明らかとなろう。

cogitatio と *scientia* との区別は、『三位一体論』における論旨の展開の中できわめて重要である。十四巻までの議論においてアウグスティヌスは、精神の中に常に存在している三一的構造を見出し、これを *imago dei* であると認めるにいたった。にもかかわらず、精神におけるこの三一的構造を神の三位一体を知るための類似と見なすことができなかったのは、そこに「常に知っている」という仕方で成立している知を、御言の類似であると認めることができなかったからである。*cogitatio* なしにことばはありえないと言われている⁵⁾。ここに言われている「ことば」という語の意味に注目しよう。この「ことば」は、もちろん *cogitatio* としてのことばではない。話されることば、書かれることばとしてのことばである。なぜ、話されることば、書かれる

ことばは *cogitatio* なしにはありえないのか。その理由は単純である。われわれは考えること、*cogitare* することなしには何ごともし話すことがないし、書き記すこともないからである。アウグスティヌスの言う *cogitatio* は、われわれがことばを使うそのとき、われわれの精神の内に成立することばの根拠である。*cogitatio* と *scientia* とを区別しているのも、このような時間的観点である。知られていることが必ずしも考えられているとは限らないという理由で、*scientia* と *cogitatio* とは区別されているからである⁶⁾。このような *cogitatio* について、いかなる言語にも属していないと言うことができたとしても、すべての人に同じであると言うことができないのは当然である。

『三位一体論』におけることば論は、ことばを捉える観点において、『命題論』におけることば論とは根本的に性格を異にしている。アリストテレスが『命題論』で分析しているのは、われわれがことばを使うそのときに成立する事態ではない。アリストテレスの言う魂の受動態は、われわれがことばを使うことができるという可能性の根拠であって、ことばを使うという現実性の根拠ではない。アリストテレスが、魂の受動態はすべての人に同じであると言うことができたのは、それが「ことばを使うことができる」という可能性の根拠だからである。現実に使っていることばの相違にもかかわらず、可能性はすべての人に同じであると見なすことができるからである。

3

アリストテレスとアウグスティヌスとではことばを捉える観点が相違しているとしても、このことからただちに、ことばそのものについての考え方が相違していると結論することはできないであろう。あるいは両者は、観点が相違するのみであって、根本的には同じ考えを述べているのかもしれないからである。

アウグスティヌスもまた、われわれがことばを使うことのできる可能性の根拠にあたるものを認めているように思われる。なぜなら *scientia* はわれわれが現実のことばを使っているか否かにかかわらず、魂の内に成立していると考えられているからである。ではアリストテレスの言う魂の受動態とアウグスティヌスの言う *scientia* とは同じものであろうか。

scientia はものから形相を受け取ることにより成立している。この点でアリストテレスの言う魂の受動態と共通している。しかし問題はそのことばとの関係である。ア

ウグスティヌスの言う *scientia* は *cogitatio* としてのことばと厳密に対応している。これに対し、アリストテレスの言う「魂の受動態」は、もしその意味を厳格に解するならば、ことばとの対応を特定することは不可能である。なぜならアリストテレスにとって、魂に働きかけ受動態を形成するのは質料的事物であり、質料的事物によって形成された受動態は感覚と呼ばれるが、感覚ははまだ特定のことばと対応していないからである。では「受動態」という語の意味を緩やかに解し、『命題論』の続くテキストの中でアリストテレス自身が述べている「観念 *νόημα*」の意味に解するならば、どうであろうか。このように解釈された「魂の受動態」がことばと原則的に一対一で対応すると考えられていることは、アリストテレス自身のことばから明らかである。「魂において観念が、真偽をともなっていないときと、必然的に真偽いずれかであるときとがあるように、ちょうどそれと同じことが音声においてあるものにもあてはまる」と言われているからである⁷⁾。しかしながらこのように、「魂の受動態」を観念の意味に解したとしても、観念が対応することばはアウグスティヌスの言うことばではないように思われる。なぜなら、一つ一つの観念は真偽をともなわないことばに対応し、真偽をともなったことばとの対応は、観念の結合分離によって始めて可能になると言われているからである。

これに対し、アウグスティヌスの言う *scientia* は、結合分離といったプロセスを経ることなく真偽をともなったことばに対応していると考えられているように思われる。たとえば次のように言われている。カルタゴの町を見ることによって獲得され、記憶に貯えられたカルタゴの心象 *phantasia* は、カルタゴについて語る時、カルタゴのことばである。また、自分では見たことのないアレクサンドリアの町の心象 *phantasma* は、アレクサンドリアのことばであり、もしこの心象を絵のように、人々に見せることができたならば、人々は口をそろえて、「そうではない。それは違う」と言うであろう、とも言われている⁸⁾。この論は *cogitatio* と *scientia* とが明確に区別される以前の、第八巻における論であるから、ここでの「ことば」という語の用法には注意が必要である。第十五巻での用法を適用するならば、*phantasia* あるいは *phantasma* そのものではなく、これらを考えるとき生まれる *cogitatio* がことばと呼ばれるべきであろう。しかし少なくともアウグスティヌスが、*cogitatio* ないし *scientia* は、真偽をともなったことばに対応していると考えていることは明らかであろう。何よりも、*scientia* という呼び方そのものが、真偽をともなったことばとの対応を告げている。

しかしながらわれわれはここで、次のような疑問を感じるかもしれない。たとえばカルタゴの町について、「カルタゴは大きな町だ」と語ったとしよう。このように語るとき用いた「大きい」とか「町」とかといったことばはどのようにして獲得されたのか。カルタゴの心象を持っているだけで、そのようなことばを語ることができるであろうか。scientia は果してアウグスティヌスの言うように、それだけでことばを生むことができるのであろうか。この疑問に対して、われわれはアウグスティヌスの立場から次のように答えることができるであろう。scientia から生まれるのは cogitatio としてのことばである。cogitatio としてのことばはいかなる特定の言語にも属していない。したがって、われわれは cogitatio としてのことばを語るために、いかなる特定の言語をも必要としない。cogitatio としてのことばを語ることで、特定の言語によってそれを表現することは区別しなければならない。カルタゴの cogitatio においては、「カルタゴが大きな町である」ということととも、カルタゴについて口にするであろうすべてのことが、いかなる特定の言語も用いることなく、語られている。

cogitatio としてのことばは、それが真偽をともなったことばであるとすれば、特定の言語を用いて表現されるとき、複数の語を用いて表現されることになるであろう。あるいは多くの語を費やしてもなお表現し尽くすことはできないかもしれない。cogitatio としてのことばは scientia と厳密に対応している。両者の間には同等性と呼ぶことのできるような関係が認められた。しかし特定の言語に属することばは、複数の語が、それもおそらくは不完全な仕方では、scientia と対応していない。話されることば、書き記されることばは、聞かれうる仕方、見られうる仕方に合わせて語られるのであって、知られていることを知られている通りに語るのではない、とアウグスティヌスは言う⁹⁾。

4

アウグスティヌスの言う scientia は、その通常の意味でのことばとの対応の仕方において、アリストテレスの言う観念とは大きく相違している。観念は、話されることば、書かれたことば、しかも真偽をともなわない語としてのことばと原則的に一対一の対応をしている。これに対しアウグスティヌスの言う scientia は、特定の言語に属することばとの対応を確定することは困難であるがしかし、真偽をともなったことばに対応していることは確かである。アリストテレスとアウグスティヌスとのこのよ

うな相違は何に由来するのであろうか。

アリストテレスが、一つ一つの概念は真偽をともなったことばに対応していないと考えたのはなぜか。ここに言われている真偽とは、事物との一致不一致という意味での真偽である。事物として結合していることを結合しているように語ることばが真であり、事物として結合していることを分離しているかのように語ることばは偽である。このようにアリストテレスが考えるとき、「事物において結合していること」あるいは「事物において分離していること」とされているのは何であらうか。それは事物そのものではない。事物において結合されていることは、事物としては始めから一つである。一つの事物に「結合されていること」あるいは「分離されていること」を認めるとき、一つの事物が複数の要素に分けて考えられている。ある一つの観念は、一つの事物に対応しているのではなく、事物を構成している一つの要素に対応しているのである。ある事物に複数の構成要素が認められるとき、それらは事物において結合されているとされるのである。

ではなぜアリストテレスは、一つの事物を複数の構成要素に分けて考えることができたのか。それは複数の事物が何らかの共通性を有しているとき、その共通性をそれぞれの事物における一つの構成要素と見なしたからである。さらに問おう。なぜ複数の事物が共通性を有していると考えられるのか。この問いに対するアリストテレスの答えは次のようなものであろう。われわれは複数の事物を同じ名で呼んでいる。同じことばで呼んでいる以上、それらは何らかの点で同じであると認識されているのでなければならない。アリストテレスが観念と呼ぶのは、このように複数の事物が同じことばで呼ばれるとき、われわれの魂の内に形成されていると考えられる認識である。このような観念が、語としてのことばと原則的に一対一の対応をしているのは当然である。なぜなら語は、われわれが複数の事物を共通に呼ぶことのできる最小単位のことばだからである¹⁰⁾。また語と対応している観念が、単独には真偽をともなったことばと対応していないことも当然である。なぜなら、観念が対応しているのは、特定の事物ではなく、不特定多数の事物のそれぞれを構成している要素の一つであるにすぎないからである。観念は、厳密な意味では、事物の類似 *ὁμοίωμα* であるとは言えない。

われわれは、『命題論』に言われている「魂の受動態」が二通りの意味に理解されることをすでに指摘した。「受動態」という語の意味を厳格に解し、「事物により魂に

形成された感覚」の意味に理解することができるとともに、「受動態」という語の意味を緩やかに解し、「観念」の意味に理解することもできた。この二つの解釈はいずれもアリストテレスの中から導き出された解釈である。しかもこの感覚と観念とは、アリストテレスにおいて、一つのプロセスを間に挟んだ始めと終わりの関係にある。『命題論』における「魂の受動態」という語の意味をテキストの中で一つに確定できなかったのは、このプロセスについて何も触れられていなかったからである。しかし、『命題論』に表明されたことばの理解を『三位一体論』におけることばの理解と異なったものとしているのは、感覚と観念との間に介在するこのプロセスに他ならない。感覚は事物との類似性、あるいはアウグスティヌスのことばを用いるなら事物との同等性を有していたが、この感覚から形成された観念はもはや、同等性という仕方では事物と対応していないからである¹¹⁾。

これに対しアウグスティヌスの言う *scientia* はものから形相を受け取り、同等性という仕方でものと対応している。したがってまた必然的に真であることになる。このように *scientia* とものとの対応を同等性という仕方での対応であると考えすることは、*scientia* の成立する領域を著しく拡大することになるであろう。アリストテレスにおいて観念が成立するために必要であった共通性の認識は、アウグスティヌスの言う *scientia* 成立の条件から、はずされることになるからである。『三位一体論』第八巻の先に引用した箇所において問題とされているのは、カルタゴの町の心象そのもの、アレクサンドリアの町の心象そのものの真偽であって、心象から形成され心象とは区別された認識の真偽ではなかった。*scientia* がものから直接形相を受け取っているとす立場において、心象を *scientia* から区別する理由は存在しない。もしアウグスティヌスが *scientia* をものについての認識一般から区別することがあるとしても、その区別の規準はアリストテレスとは異なったものであろう。

5

しかしながらここに、次のような疑問が生じてくる。アリストテレスが観念を事物の直接的な類似であると考えなかったのはなぜか。それは観念を事物の直接的な類似であると考えることが困難を帰結すると予想されたからではないか。*scientia* はものの直接的類似であり、ものと同等であると考えアウグスティヌスは、アリストテレスにとって困難であると感じられた問題をどのように回避しているのであろうか。事

物と観念との間に直接的類似という関係を認めるとすれば、どのような問題が生ずるのか。アリストテレスの立場から、次の二点を指摘することができるであろう。

第一に、観念が事物の直接的な類似であるとするなら、それぞれの事物に対応した観念を認めなければならないことになる。事物は無限に多様であるから、観念も無限に多であることになる。

第二に、事物の多様性はたんに事物の複数性のみではない。一つの事物が時間的に多様である場合もある。したがってもし、観念を事物の直接的な類似であるとするなら、一つの事物についての観念を時間的にも多数化するか、あるいは、一つの事物の観念は一つであると認めて、事物が変化したときに、観念はもはや事物の直接的類似ではないと考えるのでなければならない。

ものと *scientia* との同等性を主張するアウグスティヌスの立場から、これらの問題はどのように説明されるであろうか。第一の点については次のように言うことができるであろう。ものと *scientia* との同等性を前提とするアウグスティヌスにとって、ものの多数であるに応じ *scientia* を多数化することは必然であると思われる。したがってまた、*scientia* と同等である *cogitatio* としてのことばも、ものの多であるに応じて多であることになるであろう。このように認めることは、通常の意味でのことばと観念との間に原則的な対応を想定するアリストテレスにとっては困難であった。なぜなら通常の意味でのことばは明らかにこのような多数性を許容していないからである。しかしアウグスティヌスにとって、そのような困難は生じない。なぜなら *cogitatio* としてのことばの多数性を認めることは、話されることば、書かれたことばの多数性を認めることは区別されるからである。もちろんアウグスティヌスも、われわれがことばを話し、あるいは書き記すときに必要とされるような *scientia* を認めているが、しかしこの意味でのことばについての *scientia* と、語られているものについての *scientia* とは区別して考えている。たとえば、「世界 *mundus*」ということばは耳を通して知るが、「世界」というものは目を通して知る、と言われている。アリストテレスが考えたように、話されることば、書かれたことばはものの代わりであるといった仕方でのことばとものとの対応をアウグスティヌスは考えていない¹²⁾。

次に、ものに時間的変化を認めるとき、観念を事物の直接的な類似であるとする考え方そのものが維持できなくなるという問題について、アウグスティヌスはどのように答えるであろうか。これもまたアウグスティヌスの認めるところであろう。*scientia*

とものとの関係は必ずしも一定ではない。観念を話されることば、書かれたことばに対応させ、この意味でのことば——というよりむしろ語の基本的同一性に注目したアリストテレスにとって、観念と事物との対応もまた基本的に同一でなければならなかった。しかし *scientia* とものとのこのような一義的対応を認めることは、アウグスティヌスにとっては必然ではないであろう。われわれはここで、アウグスティヌスの言う *cogitatio* としてのことばが *scientia* から区別された理由を思い出さなければならない。知られていることが必ずしも考えられているとは限らないという理由によって *cogitatio* は *scientia* から区別された。アウグスティヌスは *scientia* に時間性を認めている。*scientia* はその時間的なあり方においてもものから形相を受け取り、その時間的なあり方において *cogitatio* に形相を与える。したがって *scientia* がものの直接的な類似であると認めることと、*scientia* は変わらないにもかかわらずものは変わりうると認めることとはアウグスティヌスにとっては矛盾ではない。ある時点で *scientia* に形相を与えていたものが、その後変化したとしても、*scientia* がものの直接的類似であるということ、あるいはより正確には、ものの直接的類似であったということは変わらない¹³⁾。

アウグスティヌスにおいて、*scientia* とものとの対応、*scientia* と *cogitatio* との対応はいずれも時間的な対応である。*scientia* のこのような時間性を認めるとき、*scientia* の成立、あるいは *cogitatio* の成立は、ものから形相を受け取るということ、あるいは *scientia* から形相を受け取るということのみによっては説明することができないであろう。現実にある時点において、形相を受け取り、あるいは形相を与えることの原因は、形相とは別のものであると考えなければならない。アウグスティヌスにおいて、ものと *scientia* との関係、*scientia* と *cogitatio* との関係が、それぞれ、形相を与えるものと受け取るものとの二項関係としてではなく、結合の原因である意志を含めた三項関係として考えられているのはこのためである。

註

- 1) *De trin.* XV, 10, 19.
- 2) *De trin.* XV, 11, 20. Proinde verbum quod foris sonat signum est verbi quod intus lucet cui magis verbi competit nomen.
- 3) *De trin.* XV, 11, 20. Pervenendum est ergo ad illud verbum hominis, ad verbum rationalis animantis, ad verbum non de deo natae sed a deo factae

imaginis dei,..... quod omnia quibus significatur signa praecedit et gignitur de scientia quae manet in animo *quando eadem scientia intus dicitur sicuti est.*

- 4) このような aequalitas の概念を確立したのは、第一巻から第七巻に至る聖書解釈である。 *De trin.* VII, 1, 1. Verbo enim quod genuit dicens est, non verbo quod profertur et sonat et transit, sed verbo quod erat apud deum et deus erat verbum et omnia per ipsum facta sunt, verbo aequali sibi quo semper atque incommutabiliter dicit se ipsum. 御父と御言の関係についてのこのような理解は、われわれの精神に御言の類似を探求するにあたって再び確認されている。 *De trin.* XV, 6, 10.
- 5) *De trin.* XIV, 7, 10. Sed quia ibi verbum esse sine cogitatione non potest (cogitamus enim omne quod dicimus etiam illo interiore verbo quod ad nullius gentis pertinet linguam), in tribus potius illis imago ista cognoscitur, memoria scilicet, intellegentia, voluntate.
- 6) *De trin.* XV, 10, 17. Sed nunc de his loquamur quae nota cogitamus et habemus in notitia etiam si non cogitemus, sive ad contemplativam scientiam pertineant quam proprie sapientiam, sive ad activam quam proprie scientiam nuncupandam esse disserui.
- 7) *De interpret.* 1, 16 a 9-11.
- 8) *De trin.* VIII, 6, 9. *Ipsa enim phantasia eius in memoria mea verbum eius,* non sonus iste trisyllabus cum Carthago nominatur vel etiam tacite nomen ipsum per spatia temporum cogitatur, sed illa quod in animo meo cerno cum hoc trisyllabum voce profero velantequam proferam. etc.
- 9) *De trin.* XV, 11, 20. Nam quando per sonum dicitur vel aliquod corporale signum, *non dicitur sicuti est sed sicut potest videri audirive per corpus.*
- 10) 厳密に言うなら、アリストテレスが行っているのは語を觀念に対応させることではなく、「語」の概念そのものを確立ないし確認することである。
- 11) この点に関して、われわれは伝統的な『命題論』解釈に従っている。この伝統的解釈は、次のような前提を有している。すなわち、16 a 8-9 のことば、「これについては魂についての書の中ですでに述べられた」を真正と認めて、「魂の受動態」を『魂論』における認識論的概念としてのそれと重ねて理解するとともに、概念 *νόημα* の成立過程については、『形而上学』第一巻に述べられた学的認識の成立過程と重ねて理解する。
- 12) *De trin.* XIII.1, 4. Hoc enim nomen disyllabum cum dicitur mundus, quoniam sonus est, res utique corporalis per corpus innotuit, id est per aurem; sed etiam quod significat per corpus innotuit, id est per oculos carnis. これに

対し、アリストテレスは次のように言っている。 *Soph. Elench.* 1, 165a 6-8 *ἐπεὶ γὰρ οὐκ ἔστιν αὐτὰ τὰ πράγματα ρηαλέγεσθαι φέροντας, ἀλλὰ τοῖς ὀνόμασιν αὐτῶν πραγμάτων χρώμεθα ὡς συμβόλοις, ……* ことばはものの代わりであるという考えを支えているのは、『命題論』に述べられているような、ことばが前提とする認識とものについての認識とを同一とみなすことば論である。

- 13) われわれはここで、永遠なものについての *scientia* と時間的なものについての *scientia* との区別を思い出さなければならない。常に *scientia* であり続けるような *scientia* があるとすれば、それはアウグスティヌスにおいては、知られているものが不変であるような *scientia* である。